

状況や、終戦近くのラジオで聞いた「日本の皆さん、さようなら」の事も、今では八代洋子になられた彼女にお電話したら、「今日樺太時代の同窓会があるから聞いてあげる」との事でとても嬉しかった。二三日して電話をよこして下さった。洋子さんは同窓会だけでなく、色々調べて下さったらしい。何しろ六十年も過ぎている。

皆の記憶からは、たしかに遠くなっているのは当然の事。洋子さんは、「私達は早く軍の命令で南下して軍の船で稚内に来たから無事だった。その後上敷香は日本軍の手で焼かれ物凄い火の海だったそうなの」私の聞きたかった交換手は真岡の郵便局（戦前は郵便局に電話の交換手も一緒だった）八名くらいだったらしくその一人からで、局長さんの敵の辱めを受ける位なら一緒に死のうとの言葉に青酸カリを飲む寸前の最後の通信だったとの事だった。その他に泊岸病院では看護婦さんも七、八名注射や薬を飲んで自決したとの話。これは内地の人にはあまり知られていないけれどもその事だった。電話交換手の像は稚内近くの小高い丘の上に、真岡に向かって「乙女の像」として建っているとの事である。ソ連の攻撃で一番被害の酷かったのは樺太庁のあつた豊原あたりで、南の方は爆撃の凄まじさ、そして略奪やあらゆる暴行、この世の地獄の様だったとか。小樽廻りの引揚船二隻は、国籍不明（恐らくソ連と思われる）の潜水艦に沈められ、助かった人もあつたが、多くは船と共に沈んでしまったとの事だった悼ましき限りである。時々ふと口に出るのは「螢の光」の中の「台湾の果も樺太も八州のうちの守りなり」の懐かしい歌詞の一節で、口いっぱい開けて歌った子供の頃の卒業式を思い出し、今はない両方の国土の事を考えるとたまらなく言い様の無い淋しさを感じるこの頃である。

外つ国となりし樺太恋いつつも

気丈に生きし君は今亡し（キヌイさんに捧ぐ）

駆足で春夏秋冬過ぐる日々

追いつきあぐねただ疲れ老ゆ

永久の平和と国の弥栄祈りつつ。

【『高田文学第三十八号』より転載】

藤川小学校の戦中・戦後

登校はラッパで行進

朝五時、集落内の静寂を破って勇壮な起床ラッパが鳴り響く。ここは藤川村入豆田の集落。吹いているのは昭和十年入学の安達善弘氏だ。彼は小学低学年からラッパを吹いてきた。肺活量の大きさだけではない。高田の兵長が来校し児童たちを並ばせてラッパの指導中に認められたのだと言う。以後彼はラッパ専門となっている。

登校する際には集落の団長を先頭にして団旗（集落）を掲げ、彼の吹くラッパにあわせて肅々で行進する。途中、年長者などがすれ違う場合には敬礼をして挨拶を交わす。学校に近づくと、校門前で回れ右をし、校門を入り、二宮尊徳像のところまで回れ左、奥にある奉安殿に深々と一礼をし、気をつけ、回れ右で教室に向かう。これが戦時中どこの集落でも行われていた当たり前の登校風景だったという。当時の校長は新鶴出身の武藤俊彦氏である。

因みに、筆者は昭和十九年に藤川国民学校に入学しているので、臆のかなたにそれらしき記憶が残っているが定かではない。校長は平山千代